

# 「探偵事夢所」

前川孝二作

- A 所長
- B 助手
- C 依頼者 1
- D 依頼者 2
- E 死体
- F 容疑者
- G 刑事

幕。中央にベッド。ベッドの上にAが寝ている。上手からBが登場。山積み書類を持っているので前が見えない。体をちょっとひねってベッドのAを発見。

B「ちょっと！ 先生、何寝てんですかあ！ 下の事務所にいないと思ったら。」

A「ああ？」

B「ああじゃないでしょ、このくそ忙しいのに！」

A「も、限界だから。頼むから一時間だけ。」

B「何言ってるんですか。この報告書仕上げないと、依頼人来ちゃいますよ。」

A「タマちゃん探しの方は任せたくないか。」

B「来るのは、浮気調査の方です！」

A「あっちか一つ。勘弁してほしいね、あのお婆さん。」

B「馬鹿言わないで下さい。」

A「何が？」

B「こんな探偵事務所に前金で払ってくれる依頼人なんて滅多にないんですからね。」

A「はいはい、熱心だね、君は。」

B「先生がやる気なさすぎるんです。」

A「探偵はこんな感じなんだよ。ホームズもそうだし。」

B「またホームズですか。」

A「そ、僕のヒーロー。君は昔からそんなに元気者？」

B「…いえ。昔のことはあんまり言いたくありません。」

A「…ま、いいけど。うー、とにかく話は寝てから。」

B「ちょっ、ええっ？ 本気で寝る？」

A寝てしまう。B、ベッド脇の床に書類の山を置き、しばらく揺すったりするが、起きないので、ためいきをついてあきらめる。床に座って、書類をぱらぱらめくっているが、こっくりこっくりし始め、ついに寝てしまう。ME。ゆっくり暗転。ややあって溶明。

C、上手から登場。Bの耳元まで近づいて。

C「うちのタマちゃん見つかった？」

B「わーっ！」  
B、飛び起きる。Cを見つめて。  
B「どうしてここに？」  
C「だって、下で呼んでも誰も出てこないんだから。」  
B「あっ、ああ失礼しました。まあ、こんなとこですみませんが、お座りください。」  
B、ベッドの隅にCを座らせ、上手奥へ行き、お茶とせんべいを持ってくる。  
B「どうぞ。」  
C「ありがとう。」  
B「ちょっとお待ち下さいね。」  
B、Aを揺り起こす。起きない。  
B「ちょっと先生！ 山田さんがおみえですよ。」  
A「待ちたまえ、ワトソンくん…。」  
B「だめだ。またシャーロックホームズになってる。」  
B、あきらめてCのもとへ。  
B「大変申し訳ありません。実はタマちゃんはまだ。」  
C「そんな！ ああっタマちゃん、今頃どこでどうして…(泣く)」  
B「(おろおろして) 頑張ってはいるんですよ。」  
C「見つかりそう？」  
B「はい必ず。でも名前、なんでタマちゃんなんですか？」  
C「ころころした丸っこいチワックスだから。」  
B「でも犬に付けないでしょう、普通。『タマちゃん』って呼ぶとすね。そこら中からわらわら猫が…」  
C「やっぱりこちらでは無理ってこと？」  
B「いえ、お引き受けした依頼は必ずやり遂げます。たとえ骨だけでも…」  
C「骨！ ああっタマちゃん！（さらに激しく泣く）」  
B「あっ、すみません。そういうつもりじゃ…、えっと、ハンカチは、」  
泣き崩れるCをなだめようと、Bが上手にハンカチを取りに行く途端に、書類の山に蹴躓いて転ぶ。  
B「あっ」  
暗転。ゆっくり溶明。CがBを助け起こしている。  
C「大丈夫？」  
B「あっ、すみません。えっと…」  
C「転んだのよ。」  
B「え？ ああっ書類！」  
B、あわてて書類を拾い始めるが、よろけて座り込む。  
C「ちょっと、だめよ、急に立っちゃ。気を失ってたんだから。」  
B「気を失って？ ああ、そうか。」  
C「しばらく横になってなさい。」  
B、横になる。下手からチャイムの音。Aの「はい」という声がする。  
A「(下手から声だけ) これはこれは隅田様。まあ、お入り下さい。」

AがDを案内して下手から登場。  
A「散らかっておりますが。」  
D「調査結果は？」  
A「お話はゆっくりと」  
D、いきなりAを後ろから羽交い締めにして、さらに四の字固め。  
D「っしやーっ！」  
A「うおおおっ。」  
D「結果はーっ」  
A「別に怪しいところはーっ。」  
D「ほんとかーっ」  
A「はいーっ」  
D、Aを放す。Aふらふら。  
D「あの女は？」  
A「職場以外で会ってるとこは確認出来ません。」  
D「おかしいな。」  
A「よくあるんですよ、思い違い。」  
D「言い切れるか？」  
A「いや、だからあと少し時間を」  
D「しょうがないな。」  
A「ありがとうございます。あ、今お茶を。おーい、川上くん。」  
A、寝ているBとその脇のCを素通りして、上手へBを探しに行き、戻ってくる。  
A「どこ行った？ あ。」  
A、床のお茶とせんべいの内の何枚かを、Dのところへ持って行って出す。  
A「どうぞ。」  
D「ありがと。」  
Dはばりばりせんべいを食う。Aはそれを見つめる。B、ゆっくり起き上がる。  
C「大丈夫？」  
B「はい、もう。すみません。お客様にご迷惑をかけて。頑張って探しますから。」  
C「タマちゃんはね、主人の形見なんです。」  
B「ご主人は亡くなられた？」  
C「ええ、つい三ヶ月前。タマちゃんをそれはかわいがって、毎日散歩に連れていったわ。」  
D「夫がね、三ヶ月前、いきなり犬を買ってきて飼い始めたのよ。犬飼いたいなんて、今まで一度も言ったことがないのによ。それから毎日散歩。おかしいでしょ、あきらかに。」  
A「だからといって、浮気かどうかは…」  
D「出かける口実としか思えないじゃない。」  
A「ええ、まあ。」  
A「うーん。」  
B「うーん。」  
A・B、無意識に目の前のせんべいを同時にかじる。その音にお互いに振り向いて。

A・B「あれ？」

A「どこ行ってたんだ？」（同時に）B「いつ起きたんですか？」

A「いや、今依頼人が来てて」

B「こっちもですよ。プライバシーまずくないですか？」

D、Cに気付いて。

D「あっ、あんた！」

C「？」

D「よくうちの人にちょっかい出したね！」

A「いやいや、この人は違いますよ。」

B「この人は犬探しをですね。」

D「犬?! そうか、お前の犬だったのか！」

C「ええっ! うちの犬がお宅に？」

B「いえいえ、そうじゃなくてですね。」

D「あんた! よくもあたしをコケにしてくれたね！」

A「ちょっと冷静に。」

C「タマちゃんを盗んだのね。」

B「違いますったら。」

CとD、にらみ合う。懐からお互いにナイフを取り出す。

B「うそお！」

A「待った待った。」

B「落ち着いて！」

AとB、それぞれの依頼人の前に立ちはだかって、腹を刺される。二人、驚愕の表情。

暗転。ゆっくり溶明。A・B、ゆっくりと刺されたところを押さえていた手を広げてみるが、

A・B「あれ？」

A「死んでない。」

B「というか、血も出てない。」

A「これ…、え？」

B「あ」

A「ん？」

B「先生、起きてます？」

A「は？」

B「だから、あんなに揺すっても起きなかったのに、いつ起きたのかなって。」

A「揺すった？」

B「…絶対、まだ寝てるでしょ。」

A「え? じゃ、君は？」

B「そうか、僕は…、寝てる…のか？」

A「どこで？」

B「たぶん、ベッドの脇。」

A「そういうことか。え? でも、なんで君が僕の夢に？」

B「それはこっちの言うことですよ。なんで勝手に入って来てるんですか。」  
A「参ったな。」  
B「じゃ、目覚めますか。」  
A「ちょっと待て。」  
A、恐る恐るDの脇腹をつつく。無反応。顔をぐにゅっと変な顔にする。無反応。決心して四の字固め。A、高笑いしながら。  
A「なるほど、絶対これ夢だわ。」  
B「ちょっといくらなんでも依頼人に。」  
A「いやあ、こんなにはっきり自覚してる夢は初めてだなあ。」  
B「僕もです。」  
A「なあ、夢だと分かったら、やりたいことがないか？」  
B「やりたいこと？」  
A「シャーロックホームズ！」  
B「出た…」  
A「難事件を二人で見事解決！ な、ワトソンくん。」  
B「ま、ワトソンならいいか。」  
上手から、Gが駆け込んでくる。  
G「〇〇くん！ 事件だ！」  
B「きたあっ！」  
A「あ、あの…」  
G「ん？」  
A「誰？」  
G「またまたあ、警視庁第1課刑事、伊達数馬。」(思い切りキザにポーズ)  
A「これ、君の夢？」  
B「え？ 先生のでしょ？」  
A「まさか。」  
G「何言ってるんだ。事件なんだよ。殺人事件。」  
A・B「殺人っ?!」  
G、ベッドの上のシーツをはぎ取る。ショッキングなME。そこに死体Eがある。  
C・D「あなた！」  
二人、死体に取りすがって泣く。  
B「あれ？ 旦那さん、三ヶ月前に？」  
C「でも、これ確かに夫です！」  
D「何言ってるの！ 私の夫よ！」  
A「おい、初めての殺人事件なんだから、あんまり複雑にしないでくれる？」  
B「いや、僕じゃないですよ。」  
A「でも、そっちのだろ、この人。」  
G「ああ、すみません。ちょっと触らないでおいてもらえます？」  
C・D「え？」  
G「まもなく鑑識が来ますんで。」

Gの携帯が鳴る。

G「あ、おれだ。何？ いやだから、その辺りの角を曲がった汚い事務所だ。」

A「悪かったですね。汚くて。」

G「あ、つい本当のことを。」

A「しょうがないでしょう。この探偵事務所自体が、路地裏にありますからね。」

G「訳ありの依頼人には尋ねて来やすい場所ってわけか。」

A「別に表通りに土地が買えれば、その方がよかったですかね。」

G「金か。」

B「先生、シャーロックホームズ狂いで、ロンドン行ったらお金がなくなっちゃんです。」

A「よけいなことを。」

G「それじゃ、また金貯めてってわけにはいかなかったのか？」

A「思い立ったが吉日って言葉もあるでしょう？僕はそうしただけです。」

B「でも、ホームズにはほど遠い仕事内容ですよ。」

G「なぜ探偵にこだわる？」

A「さあ、何故と言われても答えられません。やりたいことをやっているだけなんです。ただそれだけなんですから。」

B「なんか、それだけで答えになってませんか？」

A「さあ。どうかな。」

B「いいですね。そういうの。」

A「君は？」

B「僕は…、自分みたいな辛い思いの人の手助けがしたくて。」

A「探偵で？　なんか崇高だねえ。」

B「そんな。」

いきなり暗転。溶明。

B「今の何？」

A「あ、ごめん。」

B「ごめんて？」

A「ちょっと寝返り打ったら目が覚めかけたみたい。」

B「この死体ほったらかしで？」

C「タマちゃんは？」

D「うちの人？」

A「まあ、なんとかしますから。」

B「と言うより、目が覚めたらなんとかするしかありませんから。」

G「ああっ！」

A「どうした？」

G「目覚めたら、私なんか、二度と出てこない感じがする。」

B「そうかもね。」

G「急いで！　せめて時間解決までいかせて！」

A「そう言われてもなあ…。」

B「そもそも、この死体、どっちの夫にします？」

C「わたしです！」  
D「こっちよ！」  
A「タマちゃん捜しで夫は関係ないだろ。」  
B「なんかコントロールきかなくて。」  
A「はあ？」  
下手から、男性F登場。一同の前を横切って、上手に立つ。  
A「誰？」  
B「…さあ。」  
G、はりきってFに警察手帳を示す。  
G「失礼、私こういうものですが、二、三よろしいですか？」  
A「刑事ドラマっぽい！」  
G、親指を立ててポーズ。  
B「ぼすぎるでしょ。」  
G「以前、この方を見かけられたことは？」  
F「いいえ。」  
G「そうですか。失礼しました。(敬礼)」  
A「あっさりあきらめるなよ！」  
B「…うそだ。」  
A「え？」  
B「山田さん、この人に見覚えは？」  
C「え？ さあ…。」  
B「よく見てください。」  
C「う～ん。あ！あの人！」  
A「知ってるんですか？」  
C「主人、よくこの人に奢らされたって！」  
B「そうなんですか！？」  
A「自分で言わせてるんだろ？」  
F「そ、そんなことしないよ。」  
C「うそ！」  
G「何でうそだと言い切れるんですか？ 現場でも見たとか？」  
C「そうよ。最近金遣いが荒いから、おかしいなって思って、仕事終わってから主人を追ったんです。」  
A「張り込み！？」  
B「追跡でしょう。」  
A「じゃ、タマちゃんくらい自分で探してほしいな。」  
C「そしたら主人、この人と会って、ブランド物の時計買わされたり、食事奢らされたりしてたんです！」  
D「だからいつもお小遣いくれてって言ってたのか！」  
いきなり暗転。溶明。  
B「また？」

A「ごめん。眠りが浅くなってるかも。」  
B「まったく、あんなに起こしても起きなかつたくせに。」  
G「急がないと！」  
A「ええっと、なんだっけ？」  
B「この人追い込んで犯人にしたらおしまい。」  
G「そんな悪徳警官みたいに。」  
A「この、妻が二人って設定もほったらかし？」  
C・D「よくも夫を！」  
F「ちょ、ちょっと待って！」  
C「何よ！」(同時に) D「何だよ！」  
F「確かに時計とか買ってもらたし、食事とかもよく奢ってもらったけど、殺してなんかいないよ。」  
G「その証拠は！？」  
F「証拠は…そっちが出すもんだろうが。」  
G「え？ まあ、そうだけど。」  
B「刑事、がんばらないと。」  
A「じゃあさあ、本人に聞こっか？」  
B「本人？」  
A、ベッドの上のEを指さす。E、いきなりむくっと起き上がる。  
E「ああ、実はですねえ…」  
G「ちょっと！」  
G、無理矢理Eをベッドに戻す。  
G「これじゃ、オカルトでしょうが！」  
いきなり暗転。溶明。  
A「うわあ、こりゃ起きちゃうな。」  
B「このままじゃ、こいつ逃がしちゃいますよ。」  
A「しょうがないだろ、証拠がないんだから。」  
B「あーっ、証拠かあっ、証拠証拠証拠、畜生！」  
いきなり暗転。やや間があって溶明。立ち位置は変わっていないが、BがFに密着している。ゆっくりとFがBの手元を見る。刺されている。はっとして血だらけのナイフをFから抜き、カランと落とすB。  
C「きゃーっっっ。」  
D「人殺し！」  
F、ゆっくりと倒れる。G、急いで容体を見るが。  
G「だめだ。」  
A「川上君、なんてことを！」  
B、血だらけの手を見て呆然としていたが、やがてうれしそうに笑う。  
B「そうか、そうなんだ。やったんだ。」  
G「何言ってるんだ！」  
B「これで、これで・・・！」

A「川上くん！どういうことだ！」  
B「こいつですよ、ずううっと僕のこといじめて、ずううっとたかって、それなのに、先生に取り調べられても、証拠がないって…」  
A「やっぱり、君の出した人物か！」  
G「だからってな！——」  
B「これで恨みが晴らせたんだ！」  
B、高笑い。  
A「川上くん。」  
B、聞く耳を持たない。  
A「川上！！！！」  
B「何だよ……。恨みがやっと晴ら——」  
A「君には探偵をやる資格がない。クビだ。」  
B「何言ってるんですか。これは夢なんですよ？」  
A「いくら夢でも…」  
B「こんなの、夢が覚めればおしまいですよ？目覚めればいいんでしょ？目覚めれば。」  
いきなり暗転。ややゆっくり溶明。Bだけがもとのまま立っている。他の人物は、ベッド脇の床に転んだEを囲んで、呼びかけている。  
A「おい！川上君、しっかりしろ！」  
C「どうしましょう。あたしのせいで。」  
D「違うよ、この人が勝手に蹴つまづいたんだろ！」  
A「川上君！」  
B、そっちを呆然とみているが、  
B「そんな……。早く！早く覚めろよ！」  
照明、薄暗くなる。ME。脇の全員がゆっくり立ち上がり、Bを取り囲むように移動する。囲いの中で、B、仰向けにぱったりと倒れる。皆がBを見下ろす中で幕。